カナダ文学と

けていたのでないかと思う。

というわけで、実在したベスューンとマクレナンの作品の主人公マルテルを比べてみろ、と学生たちにこちらがいくら要求してみたところで、学生たちには、両者を比べる手だてがなかったのである。このように実在のベスューンが霧に包まれたまま、いや人の意識から抹殺されたまま、『夜の終りのとき』の主人公マルテルについて、やれこの人物は神話的巨人であるとか、やれ現代の超人だといった賛辞が相次ぐというカナダ批評界の提灯持ち的状況も、私の苛立ちに拍車をかけることとなった。

私は推理ものを解くように、実在したベスューンの生き方の軌跡と小説に描かれたマルテルの生き方を仔細に比べ、簡単にして明快な結論に到達したのである。つまり、小説の主人公マルテルは実在人物のベスューンをモデルにしながら、それを変容し、矮小化し、歪曲し、一般読者(つまり「公序良俗」)の理解力と好みに合わせた、いわば実在人物のポピュラー版にすぎない、という結論なのである。私は教室でもこの見解を披瀝し、論文にも発表した。もちろん当のマクレナンは、予想通りムキになって(気色ばんでという感じだった)、わざわざ手紙を寄こして私の解釈を否定してきた。いまでもマクレナンは、ベスューンのことを質問されると、とたんに口を緘じて不機嫌になるという(スチュワート氏から筆者あての私信による)。よほどベスューンの問題に触れられるのが嫌いだとみえる。このように原作者の賛同を得ることのできなかった私の論証も、いくらか説得力があるとみえて、P・ゲッチ編『ヒュー・マクレナン』(トロント、一九七三年)にその大部分が収録されており、いくつかのカナダ文学研究書の書誌の中に参考文献として挙げられるようになった。私の苛立ちの必要も少しは減じたかにみえる。

私がかつて行なった論証の過程をここで詳述する紙数はないが、実在人物ベスューンと作中人物マルテルの共通(類似)点の一部だけを挙げるなら、(一)どちらもモントリオールの名外科医という高い社会的地位を抛ってスペイン戦争の共和国側に馳せ参じる(これがいちばん大事な基本パターン)、(二)どちらも第一次大戦に従軍し、二人とも大腿部に負傷する、(三)どちらもフレンチ・ユグノー系である、(四)どちらも結婚生活が破綻する、(五)どちらも医療の社会面経済面を重視する、などなどと細部に若干の違いはあるものの、おどろくほど一致点が多い。性格の描写になると外面よりもっと類似が目だつ。これをすべて偶然の一致といいきれるのだろうか。マクレナンはベスューンのことをまったく意識せずにマルテルという人物を独自に造型しえたのだろうか。三十年代にモントリオールで教鞭をとり、医師ベスューンの噂をいやというほど聞かされたに違いないマクレナンの場合、これは考えられないことである。

アランとゴードン共著のベスューン伝が世に出たのは一九五二年。マクレナンの『夜の終わりのとき』の公刊は一九五九年となっている。『夜の終わりのとき』を書くのに六年から八年かかったと作者自身が述懐しているのだから、マクレナンがベスューン伝の主人公を、自分の作品の主人公として作者も読者も納得がいくように仕立て直すのに、ちょうどそれだけの時日を要したのだと推定しても必ずしも無理ではなかろう。それで計算が合うのである。アラン、ゴードンの『メスと剣と』を読んだとき、こういうベスューン像では困る、という思いがマクレナンの脳裡をかすめたに違いない(と私は推定する)。

文学作品の作中人物に実在のモデルがあれば、作中人物がそれに類似するのはむしろ自然であろう。また作者の解釈によって、実在人物から作中人物があるていど離れていくのは、これまたきわめて自然なことである。しかし、当初から私の気になり、私が問題にしてきたのは、自分の作品の作中人物にふさわしくなるように、実在人物(ベスューン)に改変を加えていく作者の終始変わらぬ一貫性だった。そしてその一貫性の中に、私は作者マクレナンの素顔がのぞいているように思えた。マクレナンは、たとえばこういう変え方をする。実在人物のベスューンがスペイン戦争に参加するのは、冷静な確固とした信念があったから(しかもこの信念は終生変わらなかった)であるが、それに対し作中人物マルテルの方は、情熱のおもむくまま、つまり若気の過ちといった形で、しかも病院の看護婦とスキャンダルを起こすというおまけつきで、逃げ出すようにしてスペインへ渡るのである。さらに上述したように、ベスューンは最後までその政治的信念(コミュニズム)を堅持し、なんら幻滅を感じることなく、第八路軍の軍医として中国でその生涯を終えるのであるが、マルテルの方は、早くもコミュニズムに幻滅し、身心両面の筆舌に尽くし難い苦難を経たあげく、ある日、突然、獄中でイエス・キリストを再発見し、幼き日の信仰に立ち返る、といういかにも「健全」な通俗小説にあつらえ向きの道を辿るのである。両者の軌跡の大筋は右の通りだが、夫婦間の細かい点でも実在のベスューン夫婦の場合よりは、男(マルテル)の方が悪者に描かれているのである。その結果どうなるかというと、一般読者にとってベスューンは、なんとも理解し難い「困った」人物であるのに対し(せめてコミュニズムに幻滅でもしてくれたら分かるのに)、マルテルになると、(神話的人物という「定評」のあるこの人物をこう評するのは申しわけないのだが)実に分かり易いのである。一般読者にとって、マルテルがスペイン戦争に参加した次第も、共産主義に幻滅した次第も、イエス・キリストを発見し信仰に立ち返った次第も、す